大堀相馬焼の今

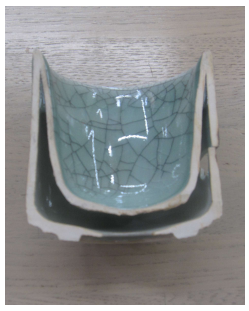
震災を越えて未来へ

走り馬、青ひび、二重焼が特徴

大堀相馬焼（おおぼりそうまやき）とは、浪江町大堀地区で作られる焼き物の名前で、３００年以上の歴史があり、相馬藩士の半谷休閑（はんがいきゅうかん）が召使いの製陶の技術を見込んで売り出したのが始まりと言われている。

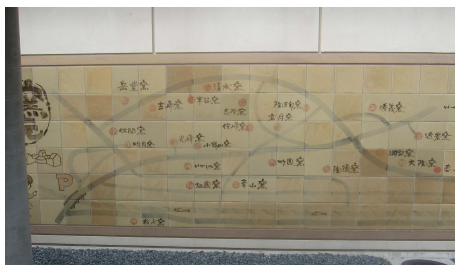
大堀相馬焼をつくっている所を窯元といい、幕末で１２０軒あったと言われている。大堀相馬焼の特徴の一つ目は「走り馬の絵」だ。これは相馬藩の「御神馬」（ごしんば）を表していて、窯元やその家族、職人が描いている。二つ目は「青ひび」だ。焼き物の素材と釉薬（ゆうやく）という薬品の収縮率の違いから入るひびのことで、人工的に入れていないため同じものはなく、世界に一つだけの大堀相馬焼ということになる。三つ目は「二重焼」（ふたえやき）だ。大堀相馬焼は底が二重になっていて、保温、保冷の特性がある。大堀相馬焼は１９７８年２月６日に国の伝統的工芸品に指定された。

取材に訪れた「陶芸の杜おおぼり」は震災前は多くの観光客でにぎわっていたが、今は作品や資料などの展示をしている。建物の外の壁には馬の絵が描かれていた。南相馬市鹿島区の画家、朝倉悠三（あさくらゆうぞう）さんが描いたもので、今にも飛び出してきそうなぐらい元気はつらつとした絵だった。



大堀相馬焼の湯呑み茶碗。三大特徴の馬の絵、青ひび、二重焼が愛されている

朝倉悠三さんが描いた馬の絵（陶芸の杜おおぼり）



震災前に存在した窯元の名前を記した地図

避難先の二本松市で休閑窯を再開させ、浪江町に通っている窯元の半谷秀辰（ひでとき）さん（71）に施設の中を案内してもらった。大堀相馬焼をつくるためのたくさんの種類の機械が並んでいた。粘土の硬さを均等にするもの、平たくするものなど、それぞれ違う役割をもっている。「昔は全て手作業で、たくさん苦労したが、今は機械のおかげで楽になった」と半谷さんは語った。

震災・原発事故で避難

復興へ立ち上がった窯元

２０１１年３月11日の東日本大震災の津波と東京電力福島第一原発の水蒸気爆発事故で、放射線量が高くなり、体に害が及ぶ可能性があった。浪江町の住民は町外避難し、各窯元も避難することになった。その結果、窯元の数は、震災前は22軒だったのに対して、震災後には７軒まで減ってしまった。

「陶芸の杜おおぼり」は二本松市で仮施設を作り再出発した。その時、浪江町民の温かい応援に感謝して、浪江焼きそばを盛るお皿を住民に６００皿配った。２０２３年６月には元の場所で再開し、大せとまつりが開かれた。現在残った７つの窯元は福島市や二本松市などで避難を続けながら、大堀相馬焼を作り続けている。

大堀相馬焼協同組合の事務所も二本松市に避難していたが、２０２１年３月、道の駅なみえ内に完成した「なみえの技・なりわい館」に新しいギャラリーと事務所をつくった。ここでは大堀相馬焼の窯元の作品を展示、販売している。馬がかわいらしく描かれた近徳京月窯（きょうげつがま）のフリーカップなども並ぶ。

かわいらしい馬の絵が描かれた大堀相馬焼のフリーカップ

震災から13年、大堀相馬焼で地域をもりあげようという思いがうかがえる。

「やりたい」思いを応援

休閑窯窯元
半谷秀辰さんに聞く

大堀相馬焼復興のため避難先の二本松から週３回浪江町に通う半谷さん

Ｑ　この仕事に就いたとき、どのような気持ちでしたか？

Ａ　小さいころからこの仕事を継ぐと思っていたので、「やらなくちゃ」という気持ちでした。

Ｑ　大堀相馬焼の良さや、特徴はなんですか？

Ａ　青ひびや馬の絵、二重焼が特徴です。二重焼は保温や保冷の効果があります。寒い季節には飲み物が冷めないようにするもてなしの心が込められています。ハート形の穴は浜千鳥を表していて、先祖は風流だったと思います。

Ｑ　東日本大震災の時はどんな思いでしたか？

Ａ　何も悪いことをしていないのに、原発事故の放射線物質のため避難しなければならず、悔しくて涙が出ました。町外に避難している時に、車に傷をつけられるなどのいじめを受けました。体重は８キロも痩せてしまうほど苦労しました。ですが、浪江の人たちの応援や、「大堀相馬焼と言ったらこれ（青ひび）」と言ってもらえて頑張ることができました。

Ｑ　この仕事を続けるうえで、課題はありますか？

Ａ　二本松市で創作しているので、「大堀相馬焼と呼んでいいのか」と思います。ですが、継続していくうちは大丈夫だと思います。

Ｑ　継承について教えてください。

Ａ　今は地域おこし協力隊を受け入れ、後継者の育成に力を入れています。無理にやっても上達しないので、やりたいという気持ちがある人を応援したいです。

編集後記

伝統継承は、最も難しい地域課題の一つだと考える。技術の継承には膨大な時間がかかり、一筋縄ではいかない。半谷さんも作り始めた当初は、うまくいかずに苦労し「技術は目で見て盗め」と言われたそうだ。大堀相馬焼には３００年以上の歴史があり、東日本大震災の避難で浪江町を去ることになっても、立ち上がったのは、伝統的工芸品である大堀相馬焼を後世まで伝えたいという思いがあったからだ。取材を通して、大堀相馬焼がどれだけ地域に密着していて、多くの人に愛されているかを実感することができた。このような伝統的工芸品を残していくためには、継承者となる以外にも、私たちのような若い世代が関心を持ち、注目を向ける必要があるだろう。（渡邉柊吾）

私たちが作りました

阿部紗也子（福島大付属小５年）
中津川千晴（原町一小６年）
八木沼杏菜（平三中２年）
阿部琴美（石川義塾中２年）
渡邉柊吾（福島高２年）